

三之卷

泉鏡花作

目次

銀鷺

黒淵

燈籠

山嵐

銀鷺が

兄様、  
兄様に肖て居るよ。  
そりや女と男だから、

ちよいと見ればまるで違つて居るけれど、第一恰好がそつくりだもの。だからね、僕はね、矢張母様にも肖て居るだらうと然う思ふさ。ほら、三上の叔母さんも、湯屋の女房さんもいつたぢやないか。兄様はおつかさんに、そつくりだつて。

兄様が東京へ行つた翌年の冬だつて。紫谷に銀の鷺鳥が出来たの。置物だつて、作は佳いか悪いか知らないけれど、何しろ大きいもので見事だつて、評判だもんだから、父様が一度見て置きたいつてね。それがはじめツから、然ういふんなら都合もあるのに、父様は例の如しで、不圖思ひたつたんだと見えて、湯へ行つて歸途に、おい、一寸寄つて行かう、といつたんだよ。

さうするとね、其前の日から舊藩主の侯爵が来て、紫谷に逗留して居るんだらう。十年年ぶりで来たんだつて、市中大騒ぎをやつて、提灯を釣す、旗を出す、旗なんか新しく拵へて騒いだんだ。

其上にね、兄様、ちやうど其日は侯爵が皆に顔を

あは 合せるといふ日なんだから、士族どもは夜が明けな  
いうちにどし／＼詰懸ける、羽織袴やら、洋服やら、  
しかん 士官の細君やら、お祭のやうで、うっかり路もある  
さいくん かね 差合も何もお構ひなしに、思ひ  
た 立つたら何てつても肯入れないで、ずん／＼行く  
だものね、僕は困つたの。

ひとり 一人で行つては危ないから、ついて行くと、もう  
むらや 紫谷の一町ばかり手前から、両側へ車が並んで、あ  
せま 狭い町の真中をすれ／＼に通る位なの、それに推  
あ 合ふんだもの。

こんな時、行つたからつて、何が見られるもので  
あすこ すか。彼處の家も目が廻るほど忙しいでせう、まだ  
でなほ 出直して來ませうつて、袖を引張らないまでに留め  
おたひきん だけれど、父様は、から平氣で、可いから來い。御  
んぞ 新造が居るから大丈夫だ、汝の知つたこつちやあね  
えつで、さつさとさきへ立つて行くんだもの。仕方  
なについて行くとね、もう門の内は人でいつぱいで  
かきわ 掻分けるやうにして通らなきやならないのを、やう  
げんくわん 玄關へ行つて、父様がまじめな顔で、頼む、頼

むていふのさ。誰が取合ふもんかね、兄様、あけひるげでもつて、皆がずん／＼出入をして居るんぢやないか。

三十分も立つて居ると、小僧がね、それでも聞つけたものと見えて、何でございますツて出て来たから、これ／＼だツて、父様がいふと、笑ひだしたんだあね、僕あ極が悪かつたのなんのつて。

案の定斷つたさ。すると父様が、何、上杉だつて奥様にさう申して見なさい、御承知だから、ともかく、といったもんだから、小僧は分つたのか、分らなかつたのか、其まゝ、ふいと入つちまつた。

しばらくすると、女中が出て来て、何うしたわけか、此方へお上りなさいツて言ふから、連れられて二室ばかり通つた時、袴を穿いた奴が出で来て、口早に何か女中に尋ねると、はい、それはといつて、其奴を案内していそがしそうに行つちまつた。

父様も僕も何うすりやいゝのかわからていから、

茫乎立つて、うろ／＼して居ると、むこうの襖の處から半分ばかり顔を出して、圓鬚に結つた美しいのが、恚う手招きをしたんだがね。大勢人は居たんだけれど、何故だか此方を呼ぶやうな氣がしたから、僕がね、父様の手を引張つて、其處へ駈けて行くと、部屋なんだ、立派だのなんのツて。矢張紫谷は大きなものだね、家中煮えるやうな騒ぎなのに、此室の方はひっそりして、聲音も聞えないで、ぞつととして寒かつた。

而して父様に挨拶して、

(お初に、) といったぜ。

兄様、父様は豪いことをいつて、まだ逢つたことはなかつたのだねえ。それから僕の顔をぢつと見て居て、極が悪いぢやないか、

(おとなしいねえ、新ちゃん。)

てツ莞爾笑つた。父様はちやうど飾つてあつた鷺鳥の置物を見てうつかりしておいでだつたが、新ちゃん、といったもんだからね、兄様、兄様のことを尋ねたことゝ思つたのか、彼は東京へ行つて居りま

す、と然ういふの。

（そんなことを承つて居りました。それでは

おや、弟御様、まあ可愛らしい。「ツて天窓

を撫でたよ、兄様、僕あ嬉しかったよ。

而してね、

（彼處ぢや、おかはりもございませんか。）

とお聞きだから、僕がいつた。達者ですツて。そ

れからね、

（新ちゃんはおいくつなの？）

（十八になります。）

（まア。）ツて呆れた顔をして居たつけ、が聲を

出して笑つてさ。

（お聞きもうしたのは、このお兒様のことですの

に。新ちゃんは、もうそんなにおなり遊ばしたかね

え。然うでございませう、久しくお目にかゝりませ

ん。實家へお遊びに入らつしやつたのは、ちやうど

このお兒の時分でございませう。）

僕のね、手を、掌で蓋をして然ういつたよ。それ

から自分で茶を入れたりしなんかして、取り込んで

居りますので、おかまひ申されませんで、眞箇に優

しい人つちやアない。ねえ、兄様さうぢやアないか。  
僕のことをね、新ちゃんノツていふの、さうしち  
や、

(おや口癖になつて。)

と笑つて居たつけ。

其の時は初めて見たんだから、そんなに氣も着か  
ないでしまつたけれど、其次餘所で逢つた時に肖て  
るやうだと思つたのは、使に行つて歸る道で。あの  
黒淵のかけ裏ね、彼處から芝居まではすぐだもんだ  
から、腕車にも乗らないで、若い者が一人と、小僧  
が一人と、女中が三人で供をして行く處で出ツくは  
してね、顔は覺えてたんだけど、むかうが大勢で  
僕はいやだつたから、俯向いて、通過ぎて、ずつと  
離れてから一寸振返つて見ると、見返つたよ。また  
しばらくして後を見ると、またむこうでも振返つた  
から、もう一度、こん度は餘程來過ぎてから見て遣  
つた。

其時はね、彼の人ばかりぢやなくつて、小僧も、  
女中も、一所に皆で此方を向いたから、僕は遁出し  
てしまつたさ。

今でも目に着いて居るがねえ、其時や、ひどく派手な装をして居たつけ。

それから、一二度も見たことがあつたらうか、ついで此間はあの、通の紫谷の出店で見た。さつき兄様に話したツけね、何だつて店は人だかりだつたものね。彼家には紫谷の妾が置いてあるツて皆が然ういふ。僕は其奴も見たさ。其がねえ。頻りにお世辭を振撒いて、此方へお入り遊ばせて丁寧にお辭儀して居たが、大事にして、敬まつて居るらしい。でも急いで居たのか。内へは入らないで、上り口に腰をかけて、片足は駒下駄を穿いたまゝ、扇をねえ、少しあげて口ン處へあてゝ、俯向いて、何か其妾がいふ毎に、

(えゝ、ええ。)

てつちや、頷いて居たんだよ。え、髪かい、髪は其時や鬘ぢやなかつた。

(奥様だよ、奥様だよ、紫谷の奥様だよ。)と囁きあつて、往來が立停つた。しばらくして歸りさうだつたから僕は家の方へ戻つて來ると、提灯が二ツ、はた／＼と駈けて來て、僕の先になつた奴が、紫谷



に走りついて、もうお歸宅だからと女中に門口で言  
つて居た。兄様、いゝ人だねえ。兄様が小兒の時に  
はなかよしだったたいふぢやないか。』

と弟は予に語りぬ。渠は何心もなかりしならむ。

水底の土の色なるべし。水の流黒ければ名としたり。岸にのぞみたる石垣の高さ四五間もあらむ。其上に板塀あり。石垣と連りて、町の角を繞りて立てり。

いろ／＼の草石垣の間に生ひ、灌木は枝を交へたるに、小笹、熊笹茂れり。この淵の流れいと緩やかなれば、夜は静なれども、水の音せず。

土手、石垣の間、路はいと細うして、衣の袖の茨の棘にかゝらざるやう、人一人肩をすぼむれば通るを得べし。横ざまに延びたる楊柳の葉は、頭に支ふるばかりなり。

川上三町ばかりの間は、市街の中央を横ぎりて遊里の岸を流るゝより、人音、物音遙に繁く、冴え切りたる婦人の聲の、聞えてはまた止みなどす。月は出でたれど空曇れり。

折からそよとの風もなきに、石垣の草の中より、落つるが如く螢たちて、土手の上に光りしが、すら

／＼と行きて大川の半ばに消えたり。

静に見送りにて、ふと我に返りぬ。

秀がこゝに嫁ぎしは、今より六年の前なりき。紫  
谷の裏手なるものを。こは予が來べき處にあらずと、  
思はず慄然とするほどに、石垣に生ひたる笹の、ざ  
わ／＼と揺れて蠢くものあり。

立去らむとせし足を留めて、腕を組みつゝ屹と見  
上げぬ。

しばしもの音もなかりしが、やがてまた動き出し  
て、石と石とのあはせ目に、足を交るがはる踏かけ  
つゝ、しづかに下りるは人なりき。

訝かしと見たる目の、いかでか渠を愆たむ。夜目  
にも富の市なりしをや。

渠は人ありとも知らざりき。草の根に縋りながら、  
爪探りにおりたちたる、下には丸き下駄ありて、一  
足正しくならびたるに、落着きて爪先を踏あてゝ、  
杖を取りて、ぬつくと立ちて、空を仰ぎて、といき  
をつきしが、肩を垂れて俯向きぬ。

予はいきを凝して見たり。

されど何等のことも仕出ださで、渠は徐に歩行き  
出しぬ。螢の光二度ばかり、しよぼけたる其背姿と、  
予とを遮りて顯れしが、ふわと消ゆる時、見えずな  
りぬ。

見送りて予は、思半ばに過ぎたり。

去にし年、師のミリヤアド、文して我を招きし時、  
秀に別れを告げむとて、深水の家を訪ひたる夜、山  
鳩の聲懐しく離れがたき心の出で来て、其夜より降  
りし雪の降りやまで積りたれば、上京の道開けずと  
いふをかこつけに、いまにも發程むと思ひたる、初  
一念はあだとなしつ。

なすこともなく年は暮れたり。明くるを待ち、暮  
るゝを待ちて、日に日に秀に慕ひ寄りては、何事を  
かし出でたる。歌留多雙六は上手になりぬ。學びの  
道は打荒びて、大空にものを思ひてき。

戒むる人ありて、強ひてまた數學教ふる私塾に塾

生せいとはなれりしかど、同どう数すう異い號がうの和わは零れいなりと、寢ね覺めにも眩つひやきし、教師けうしの口癖くちくせを習ならひ取りて、人ひとの氣きに染そまぬことをいふごとに、横よこを向むかきて、

(同どう数すう異い號がうの和わは零ぜろなりですから。)

恚かくいひ消けしては、笑わらふことの、快こころよきを覺おぼえしのみ。  
十じゅう月がつ三さん日にち、日ひもなは忘わすれず。挟かむこと渠かれが如ごとくなり  
し富とみの市いちの、六む月つき七なな月がつ逢あはざりしが突とつ然ぜん予よが塾じゆくにお  
とづれ來きて、

(新しんちゃん、秀ひでさんが、嫁よめ入いりをします。)

と一言ひとこといひて歸かへり去さりき。日ひもなほ忘わすれず、十じゅう月がつ三さん日にち。

燈籠

東京にわが行きたるも、また秀のあればなりき。  
一夜予が弟の、不圖熟睡の蚊帳を出で、一文字につか／＼と戸口に行きて、半ば入口を開けたるを、慌しく抱止め、叱れど、ものもいはでうつとりする、目は全く眠りたれば、太く怪みながら其まゝ臥床に推遣りしに、はたと倒れてまた寐たり。あくる日になりて問ひたれど、露ばかりも昨夜のことを知らずといふに、人は時としては夢の中に、實際ある働きを為し得るものぞと確めたるより、予はみづから危みき。

紫谷は近し、予が家より幾程もあらざるを、いかなることをかしいださむ、とために上京も急ぎしなり。今年やまひありて歸りし身の、秀が三たび顧みたりと、弟が告げたればとて、黒淵の崖裏を、夜深くなりて二三ふことか？！

母上、憐みたまへとて、予は其の墓前にうなだれぬ。

墓はかの際きはなる松まつの枝えだより、背後うしろなる卒堵婆そとばに繩なはを渡わたして、燈籠とうろう三ツばかり結びかけつ。油あぶらさしの未いまだ來こざれば、灯ひも點ともさである、山中さんちゆうの日は黄昏たそがれて、森もりの中なか暗くらうなり、手て向むけたる線香せんかうのそよ吹ふく夕風ゆふかぜに灰はひ落ちて、赤々あか／＼と燃もゆるが見みゆ。

心こころ細ほそうなるに、蚊かの聲こゑ低ひくく耳許みみもとにひとつ鳴なく時とき、墓經はかきやうよ讀よむ法師ほふし來きたれり。童顔どうがん仙軀せんく、髯ひげ白しろく頤おとがひを埋うづみ、白しろき眉まゆ長ながくぞ低たれたる、渠かれは尊たふとき聖人ひじりとよ。麓ふもとの庵いほに住すみ給たまふが、予よが六歳つ七歳つの頃ころも今いまもなほおもかげかはらで、身みも太いたく健すこかなるが、飄然へうぜんとして來きた給たまひぬ。

座ざを譲ゆづりて傍かたへにある時とき、つと前まへに進すすみ給たまひて、妙たへなる法のりの聲こゑはや聞きこえたり。

讀經どきやうやがて半なかばにして、油あぶらさしの老夫をぢめく巡めぐり來くる、三ツの燈籠とうろうにみな灯ひを點てんじて、竹たけと、わがねたる藁わら繩なはを兩りやうの手てに提ひきげたるまゝ背うしろざまに手てを組くめる、腰こしはやゝ前まへの方かたに屈かゞみたり。年とし紀し五十ごを越こえたらむ、口くちはキと引ひき緊しまりてものゝしく見みゆるから、無ぶさ法はふに太ふとき眉まゆつきと、しをらしき目めに愛嬌あいけうあり。深ふかき皺しわ

幾條か刻みたる額禿げて、白髪まじりの頭髮なほ濃なるが、聞惚れたる面色して、片頬に笑を含みつゝ、予が背後に聽聞す。膝切の股引短く、太き筒袖の腰までなるを着て、胸毛黒々と襟廣く、小倉の帯の幅狭きを前さがりに結び居れり。

燈籠あまたゝび風に戦ぎて、明くなり、暗くなり、消えむとして、さだまりて、臘のながるゝ音す。

讀經しはて給ひたれば、ソト布施を参らすに、老僧は受納めて、しわびたる掌もて、童かなんそのやう、しづかに予が頭を撫で給へり。

「せいだしておとなになれよ。」

と微笑して、念珠持ち給ひたる手の衣の袖に隠るゝはしに、老夫は身を退りて一揖し、

「和尚様、彼處でお墓經を、と申して待たつしやりますで。」

「あい／＼。」

と頷き給ひ、老夫を具して去り給ふ。

立あがりたるあたり、遠く、近く、十ばかり、一



ならびに三ツ二ツ、處々に、遙に離れて一個など、  
數百の燈籠風をさそひて、樹間々々に暗く見ゆ。

母の墓なるが臘盡きて、なかの一個いま消えかゝ  
り、ばち／＼と煮ゆる音に、ふと見返れば、予が家  
より参らせたるものゝほかに、別に一個の燈籠あり。  
印の小松の根に寄せて、墳墓の上に置きたるが、夜  
露にすら／＼と濡色茂れる、夏草の葉越に透きて、  
山風に濕りたる灯の影冴かに、小松の翠色浅／＼、  
一葉一葉に宿りたる、露玉くる／＼と照り添ひて、  
奥床しうも優しく見えぬ。

孟蘭盆の魂祭に、迎火送火は焚かざれど、菩提寺に、墓地に、祖先を祀りたる處には、家々より燈籠を携へ行きて、墓詣の時御明を點ずるなり。家の内に、魂棚はいま造り設けず。燈籠は一家、親族、寺は違へ、墓こそ別なれ、志す靈のあるものは、皆靈前に手向くる習ひを、誰が母上に供へくれけむ、心當りのあらざるにぞ、予は露の中をすかしたり。

志す佛の名と、手向けし者の姓名とを、書着けて置くなれば、とさし覗き見たりしが、草の葉蔽ひ茂りたれば、此方よりは讀めざりし。掌をさし入れて、少し押分くるに、ひや／＼と指ぬれて、可惜露はら／＼とこぼれぬ。

字は鮮かに讀まれたり。

新ちゃんの母様

御墓

紫谷内

と書つけたる、二ならびの女文字、ぢつと見詰むる瞳に映じて、其文字燈籠をはなれつゝ、露白く、草白き、灯影のなかに鮮かに描かれて、空に浮びて

ちらりと見えたる、爾時松の梢颯となりて、夜風冷かに身に染みぬ。

他の二個の燈籠は、かはる／＼ともれはてつ。今は唯其一つのみそ残りける。

あたり暗うなりたれば、墳墓の上の草の中のみ翠滴りて、松の葉すこしばかりあかりのもれたる、其處ばかりは、いよ／＼照り増りて、露の色一入うつくしきに、青き蝗の小さきが一ツ葉末に縋れり。

近よりつ、また遠のきつ、視め飽ずいむに、谷一ツ隔りたる向の峰裏に打鳴せし輪鉦の音の、ふと亂れ初めて、山おろし烈しくなりぬ。

草の葉颯となびきて、蝗の足動き出せり。袂も裾もあふりはじめぬ。

遠き山、近き谷、今は數ふるはかり消え残りたる、燈籠の灯のあかきと、くらきと、上下に皆動けり。

鳶が峰の樹立深きあたり、波立つ如き風の音して、

轟々とばかり吹きまसार。

右にめぐり、左に立ち、前を蔽ひ、背後を圍ひて、墓所の風を遮れども、彼の燈籠のあふち烈しく、臘の灯ひたとおし伏せられては、心細くなりゆくに、堪へず草の中より取出だして、おろして、墓前の地に据えつ。

兩袖をもて圍ひしが、なほ隙間もれて、あはやと臘の灯のまたゝくにぞ、消されむことの口惜しきに、手早く胸の紐解き棄てゝ、予は羽織を脱取りつゝ、燈籠を上より包みたり。

灯影はやがて静になりぬ。  
星の影樹の間に洩れたり。  
時にこゝの前を登音して、森を二人ばかり過ぐる  
と覚えし、急に立停りて、

「あれ變だぜ。」  
「何うかしてるんぢやないか。おや、」  
と囁き合ひて、わが方に近寄る氣勢す。予は胸を打ちて、疾く踞まりし身を起し、故と顔見らるゝや

う、其方そなたを向むきて少すこしく笑あはれ含ふくみしに、俄にはかにひつそ  
となりぬ。稍やありてばたノと遠とほざかる音おと高たかく、遙はるか  
にわつといふ聲こゑせしが、其その後のちは聲こゑもせず、風かぜもま  
たいつしか止やみたり。

輪りん鉦しんの音ねも聞きえずなりぬ。

ひとつ消きえ、二つ消きえゆく山中さんちゆうの燈籠とうろう、纒わづかに草くさが  
くれの螢ほたるかとはかり消きえのこる。

いまはとて伏ふし拝おがみ、ふたゝび舊もとの處ところに置おきて、幽かすか  
なる其そのあかりを辿たどり、二本ふたもと三本もと、松杉まつすぎを潜くゞり出いでゝ、  
見みかへれば、燈籠とうろうの灯ひはなほ點ともれぬ。

小戾こもとりせしが思おもひ返かへしつ。一反いったんばかり隔へたりて、更さら  
に遠とほざかりて、更さらに歩ほを移うつして、また更さらに顧かへりみたる、  
満山まんざん黒くろき森もりの中なかに、青あをき灯影ほかげの草くさの露つゆ、母ははの精靈みたまの  
消きえやらず、君きみが情なさけは盡つくきざりき。

【三の巻・完】